

安彦忠彦著「自己評価のすすめ—『自立』に向けた『自信』を育てる—」(クレイス叢書)図書文化社 2021年3月16日刊を読む(I)

1. 「自己教育力のために」

- (1)①「現代」では、人間にとって「知識」よりも「知恵」が重要で、「知識」はコンピュータにビッグ・データとして内蔵される時代になり、人間は知識を、何から何まで無際限に記憶する必要はなくなりました。
 - ②むしろ、記憶すべき知識を絞り込み、目的に応じてそのビッグ・データを処理するコンピュータや AI を吟味し、縦横に操る「知恵」の能力こそが求められるようになりました。
 - ③その「知恵」は、まさに「意味」や「価値」にかかわっており、それらとの関係のもとに、人間が自らの行為・言動に「自信」をつけるために、向上心を保ち、どれほどきちんと「自己評価」することができるかにかかっています。
- (2)①そして、この「知恵」は、最終的には AI から「自立」する基礎となるものでなければなりません。
 - ② AI を相手にして、それからも学ぶとともに、それを自分のため、周囲のために効果的に生かす能力が必要です。
 - ③それが「自己教育力(自己学習力)」であり、それには「自己評価」をしっかり行える人でなければ効果的な「自己教育」は成立しません。
- (3)①「教育面における自立」は「自己教育力を持つこと」を意味します。
 - ②その観点からみれば、この意味で、「自己評価」によって得られる「知恵」を通して「自信」を増し、それによって「自己教育力」を健全で効果的な「自立」に向けて育ててほしいのです。

2. 「自己評価は必ず両面で」

- (1)①「自己評価」は自分の悪かったところ、失敗したところを改めて、少しでもよい方向に変えていくことだけを意味しません。
 - ②むしろ日本人には、自分たちのよさや成功したところを他国の人に促していくことも、いままで以上に必要です。
 - ③日本人は、「自己評価」というとすぐに「反省！」というマイナス部分を重視しがちですが、むしろ「日本人の独自のよさ」を、世界に貢献できるものとして提言していけば、まさに「自信」というものが生まれるのです。
- (2)①日本人の間では、「自己評価」という言葉を一面的に理解し、それは「過去志向」だからよくない、むしろ日本人を「未来志向」にするには、よいところをどんどんほめること、「ほめる文化」に変えなければいけない、と主張する人がいます。
 - ②とくに欧米の文化に触れて、その種の文化のよさを実感した人ほど、そう反論してきます。
- (3)①しかし、日本人はそちらの文化に乗ると、往々にして一部の人のように、周囲の賞賛に有頂天になり、自国を絶対視して何でもよしとする、視野の狭い「過信」になりがちです。

②単なる「手前味噌」の独善的な自己顕示でなく、世界の人々の役に立つという「国際貢献」の文脈で、他の国々のよさも正面から認めつつ、自分たちのよさもその一つとしてアピールするものでなければなりません。

③その「本来の謙虚さ」が、かなりの日本人に欠けているのです。

(4)①「自己評価」は、その意味で決してやさしいものではありません。

②しかし、冷静で、誠実に、公正な評価を自己に対して行うこと、また行おうと努めることは、周囲の人々、世界の人々に「信用」を与えます。

③そのためにもこれからの時代、日本人はそのような「自己評価」活動をすることが、必要不可欠の文化として求められてくるでしょう。

④そしてそれは、例えば「環境影響評価」のような形で、遠からず「地球全体の」グローバルな営みとして、全ての国の人々に必要なものとして受け入れられると信じます。

⑤「日本は自己評価をきちんとやり続けている国だ。日本人は自己評価をできるだけ厳密にやろうと努めている」といった評判を世界的に得られるようになれば、そのような「信用」を通して、日本人の健全な「自信」が必ず生まれるものと信じています。

P181 ~ 183

<コメント>

日本カリキュラム学会元会長で、教育評価の第一人者である安彦忠彦(あびこただひこ)先生の名著「自己評価—『自己教育論』を超えて—」の続編、待望の最新著「自己評価のすすめ—『自立』に向けた『自信』を育てる—」が3月16日に刊行されました。「自己教育力のために」を「自己学習能力の育成のために」と読み替えれば、開倫塾の教育目標である「自己学習能力の育成」の深い理解と発展に役立つと確信します。「自己評価能力の育成」があってはじめて、「自己学習能力の育成」が成り立ちます。今後は「自己評価能力の育成」も大いに研究しましょう。

2021年3月26日(金)林明夫